

人文学会報

No.81号
2019. 3. 18

事務局 鹿児島市下伊敷一丁目52番1号 県立短期大学文学科研究室
鹿児島県立短期大学 人文学会

電話(〇九九)二〇一―二二一

〈研究室だより〉

国内留学を終えて

遠 峯 伸一郎



二〇一八年四月から九月までの六か月間、東京の立正大学へ国内留学をする機会を得た。県短での校務のあわただしさを離れてじっくりと研究を進めることができた大変有益な半年であった。国内留学が始まる直前までの四年間は、学科長としての多岐にわたる業務のために思うように時間が取れなかったこともあり、まとまった時間が取れたのは大変ありがたかった。このような機会を与えていた

だき、文学科を始めとする県立短大の先生方に心より感謝したい。

今回八年ぶりに戻った東京は、あらゆるものが揃った、整備された場所であると改めて感じた。細かく張り巡らされた交通網など実際の側面だけでなく、文化的にも大変充実した場所であると再認識した。伝統ある大学が多数集まり、研究のリソースに事欠くことはなかった。私は英語学（特に英語史統語論）が専門で、中英語（紀元後一一〇〇年から一五〇〇年の英語）、近代英語（同一五〇〇年から一九〇〇年の英語）のテキストを調査することは研究活動の重要な一部になっている。最近では、これらのテキストは多くがコーパス化されていたり、機械的に可読化されたGoogle Booksなどで簡単に閲覧できるようになっている。しか

し、全てのテキストが電子化されているわけではないし、電子版は正確性が万全ではないという問題もある。テキスト以外では、著作権の切れていない多くの研究書は当然ながらウェブ上で閲覧できない。結局紙の本が必要になることが多くなるが、幸い東京では、留学先の立正大学の図書館だけでなく、立正大学の近隣にある清泉女子大学や、東京での滞在先に近かった立教大学で、多くの文献を見ることができた。そのおかげで研究をスムーズに進めることができた。ちなみに、清泉女子大学は明治時代に鹿児島・島津家の屋敷があった場所に位置する。敷地内には現在でも邸宅が残っており、この邸宅は東京都指定有形文化財になっている。東京にいながら、思わぬところで鹿児島とのつながりを見出した。

東京では研究を進める傍ら、県短での教育のために必要な文献閲覧や情報収集も行った。その中でも、二〇一八年七月

に成蹊大学で聴いた東京大学の阿部公彦先生の講演が大変勉強になった。講演は、話し言葉と書き言葉の乖離の程度が

日本語と英語では異なるという内容であった。この主張は、言われてみればごく当然のことと感ずるが、自分で言い当てるのは難しい。それゆえ、講演を聴けたことは大変有り難いことであった。現在進められている、TOEICや実用英語技能検定などの民間試験を大学入試に導入する施策について考えるための手がかりにもなったようにも感じられる。

国内留学中は、帰鹿後も同じように研究を進めていけると甘い期待を持っていたが、実際、二〇一八年度後期が始まると授業や校務で多忙を極めた。今、後期の授業が終わり、多忙だった校務から解放されて、再び研究に時間を割けるようになってきている。県短に着任して早八年、

（文学科英語英文学専攻 教授）



〈卒業にあたって〉

短大生活を振り返って

文学科日本語日本文学専攻

四反田 亜美

卒業を前にして私は、入学式の学長の言葉を思い出す。短大は入学と卒業の年しかない。二年間はあっという間に過ぎる、と。卒業してからの将来のことを入学した日に話されたことに驚いたことを覚えている。その時は、卒業後のことを考えるなんて正直まだ先のことだどこかで感じていた。

新たな生活が始まった頃の私は、新しい出会いや環境への興奮より第一志望の大学に落ちた悔しさの方が強かった。気持ちの整理ができないまま入学式を迎え、どこか投げやりな気持ちで始まった

短大生活だったが、毎日の忙しいスケジュールをこなすことに精一杯でいつしか

その悔しさも薄れていた。また、毎日の忙しさに友人と弱音を吐きながらも過ご

す中で、自分と同じような思いを抱えて

県短で過ごしている友人がいることを知った。悔しい思いを持つているのは自分

だけじゃないと知り、ここでしかできないことをやろうと思うようになった。不

合格の悔しさや短大の忙しさを共有し、

共に乗り越える仲間と出会えたことが、

短大生活を楽しく充実したものにしたい

という前向きな思いで過ごすようになった

たきっかけだと思う。県短は同じ専攻の

人数が少ないためか大学では味わえない、

高校のクラスのような仲の良さだった。

誰といっても居心地がよく、昼食や講

義の合間のたわいもない会話がとても楽

しかった。短大の忙しく大変な毎日に乗

り越えられたのも、楽しく過ごせたのも

この日文のメンバーだったからだと思

う。笑いの絶えない、楽しい毎日を過ご

せたのはみんなのおかげだと心から思う。みんな本当にありがとう。

心のどこかで将来のことについて考える時間はまだ先だと思っていた。しかし、

短大生活になれた頃には少しずつ今後のことに關しての講義などが増え、

将来について考えるようになった。日に日に講義や友人との会話で将来のことにつ

いての話題が多くなっていき、スーツ姿

の先輩を見かける度に次は自分の番だと思

意識するようになっていた。これまで将来について考えることを避けてきたため

に、自分を見つめる作業は簡単ではなかったが、

自分の未来を想像していくうちに私は公務員を目指すことに決めた。一

年生の十一月頃から私はダブルスクールを始めた。忙しい毎日は想像していたもの

より大変で、高校生に戻ったような気がするほどの多忙な生活に逃げ出したい

なる時もあった。そんな時に支えてくれたのは、やはり日文の友人達だった。同

じ目標に向かって頑張る友人や自分の夢

に向かつて努力する友人の姿が励みにな

った。また、一番近くで支えてくれる家

族の存在も大きく、今、振り返って見ると

本当に多くの人に支えられていたことがわかる。友人や家族はもちろん、

面接指導などでお世話になった学生課の方々、

悩んでいる時にアドバイスをくださった先輩などたくさんのおかげで

合格をつかみ取ることができた。お世話になった方々への感謝を忘れず、恩返し

短大の二年間を通して、多くの人に出会い、様々なことを体験してきた。悩み、苦しむ時もあったがそれと同じくらの楽しく充実した時間があった。どれも県短に来たからこそできた経験で、たくさんのことを学ぶことができたと思う。四月からはいよいよ社会の一員としての新たな生活がスタートする。不安もあるが県短で経験したことも含め、自分の置かれた環境でそこでしかできないことに取り組みたいと思う。そして周りへ

の感謝を忘れず、様々なことにチャレンジしていききたい。



これからの未来へ

文学科日本語日本文学専攻

野 中 未 来

真新しいスーツに袖を通し、緊張と不安、そして期待を抱きながら入学式に臨んだことを、まるで昨日のことのように思い出します。私にとって鹿児島県立短期大学で過ごした二年間はあっという間でした。当初自分の望んでいた進路ではなかったということもあり、この決断でよかったのか本当に後悔はしないのか、

何度も自問自答したことを今では懐かしく思います。当時の私に伝えることができるならば、「あなたの選んだ道は間違ってたなかった。」と言いたいくらい私にとって素晴らしく貴重な二年間でした。二年間の中で辛いことがなかったといえは嘘になりますが、辛いこと以上に楽しかったことが沢山ありました。

大雨の中行われた入学式。友達のいない新天地で友達が出来るか不安を抱えていたけれど、そんな不安もすぐに消え去りました。入学式初日、緊張していた私に声をかけてきてくれて、仲良くなった三人の友人は、私にとって一生涯の大切な宝物です。また三人だけではなく、私の専攻していた日本語日本文学専攻の人達とも思い出の詰まった濃密な時間を過ごすことができました。年二回あった体育祭や文化祭。特に一年生の頃の文化祭では、学科ごとに劇を行いました。台本は一から作り、衣装も自分達で作りました。みんな忙しい中で時間を作り練習を

したことで、それまで以上に仲が深まるきっかけになったと思います。

私にとっての鹿児島県立短期大学で過ごした時間は、毎日が楽しいものでした。というのも、高校生の頃は勉強漬けの毎日を過ごし、自分が何がしたくて何の為に勉強しているのか何のために努力をしているのかわかりませんでした。高校を卒業し、自分が望む大学へ行くために予備校に通いましたが、そこでも自分の中に夢や目標を見出せず、勉強をしながらも自分の人生に不安しか抱いていませんでした。そんな私が鹿児島県立短期大学に入学し、日本語に関する専門的な勉強をしていくなかで、自ら能動的に学ぶ楽しさを知りました。勉強すればするほど、知りたいことが増え、毎回の授業が楽しく、勉強することは苦痛ではないと思えるようになりました。本を読むことが好きで国語が得意という理由で専攻した学科でしたが、日本語や日本文学を専門的に学ぶ中で、他言語、特に韓国語

に興味を持ちました。全く基礎知識のない状態から勉強を始め、最初は文字の読み方すらわからなかったのが少しずつわかるようになり、わかることが段々と増えていくことが楽しくて仕方ありませんでした。これが将来に生かせればと考えた始めた事が、仕事選びの基準の一つとなりました。元々美容業界には興味があり、語学も活かせるということもあって美容部員を目指すようになりました。今までただひたすらに頑張ることだけをしてきた私でしたが、大学生活を通してようやく自分がやりたいことが見つかりました。

この春、私は鹿児島県立短期大学を卒業し社会人になります。就職活動では、学生課の方々に大変お世話になりました。そのおかげで第一志望だった企業に入る事ができました。社会に出たら楽しいことばかりではないでしょう。辛いことにもたくさんあると思います。しかし私にはこの鹿児島県立短期大学で過ご

した二年間があります。辛いことがあったとき親身になって話を聞いてくださった先生方、どんなときも味方でいてくれた友人、かけがえのない思い出達が私を支えてくれることでしょう。毎日同じ時間を過ごした友人達と会えなくなるのは寂しいけれど、次会える日を楽しみに邁進していきたいと思います。

皆さんのこれからの未来に幸あれ。



人生の

ターニングポイント

文学科英語英文学専攻

中村沙里

鹿児島県立短期大学での生活は、私にとって人生のターニングポイントとなるような3年間でした。これからの私の人生の中で、何度も支えてもらい得るであろう友人に出会え、これからの人生をより豊かにしてくれるであろう考え方や価値観を得ることができました。卒業を目前に控えた今、そんな3年間を振り返ってみたいと思います。

この大学生活の3年間の中で、最も大きなターニングポイントとなったのが、ハワイへの短期留学です。これは、私にとって大きな挑戦でもあり、チャンスでもありました。初めは、ただ「英語力を

向上したい」という単純な理由で留学を決めました。ですが留学先の授業でのディスカッションやプレゼンテーションを通して、習慣や文化が違うことを実際に目にし、新しい価値観や考え方を知ることができました。留学中はホームシックになったり、トラブルに巻き込まれたり、英語力以外に悩むこともしばしばありました。もう留学なんかやめて日本に帰ろうとしたこともありましたが。そんな私を前に向かわせてくれたのは家族や友人などの私の周りを取り囲んでくれている人たちでした。日本から離れて生活したことでも普段当たり前になっていて見えないう感謝や人の温かさを感じることもできました。日本にいるときも感謝や温かさを感じたことはありませんが、時にそれが当たり前になってしまっていた部分があった気がします。これをきっかけに改めて普段の生活がどれだけ幸せなことかに気づくことができました。

またこの留学を通して、どのような状

況に置かれてもそれがプラスになるかマイナスになるかは自分次第だと気づくことができました。留学前、私は留学先次第でどのくらいの英語力がつくかが変わると思っていました。ハワイには多くの日本人がいるため、英語力があまりつかないのではないかと考えていましたが、実際に行ってみると、自分の行動次第でどれだけでも英語力を向上できることがわかりました。できるだけ日本人観光客の多い土地には行かず、現地の方々や触れ合えるような環境に身を置きました。その環境に身をおく事は時に辛い時もありましたが、最終的には予想以上に英語力を身に付けることができました。この短期留学を乗り越えた事は、とても自信に繋がりに、その後の就職活動にもいかすことができました。

そして、私はこの3年間、学校で出会った友人や先生、留学先で出会った友人やホストファミリーなどとても恵まれた出会いがたくさんありました。初めはた

った2年間の学生生活で、そこまで関係の深い友達はできないだろうと思っていました。しかし、私のクラスの人たちはみんなとても優しく、元気ですぐに仲間になりました。1年生のときには全員で協力し、文化祭の出し物で優勝することができました。行事や普段の生活を通して、日に日に絆が増していったような気がします。何にも用事がないのになんとなくみんなが集まってしまう食堂、テストや課題に追われながらも励まし合いながらがんばった授業、初めてのことでばかりでドキドキしながら過ごした海外研修、どれも素敵な思い出です。そしてその中でも、私は友人に助けをもらう機会がたくさんありました。私に何かあった時、いつも隣から元氣付けてくれました。先生や学生課の方々も同様に留学中に気にかけてくださったり、就職で悩んでいる時に励ましてくださったりと、周りの人たちの温かさには、もう感謝してもしきれないぐらい感謝しています。

来年度4月からは新社会人となり、新しい環境の中で生活していくことになり、この3年間での出会い、経験を一生大切にしていきたいと思います。そしてこの3年間で助けてもらった分、次は私が困っている誰かに手を差し伸べられるようなそんな社会人になれるよう頑張っていきます。

Where there is a will,
there is a way.

文学科英語英文学専攻

西元 萌々花

短い二年間が終わった。入学当初は、この二年間がこれほど濃密な時間になるとは思っていなかった。文化祭で優勝したり、自治会やたび部に入ったり、留学生と登山をしたり、沖永良部島の石井

先生の出張授業に参加したりと、思い出を数えたらきりが無い。すべてが私に刺激を与えてくれた素晴らしい思い出が、この限られた字数内では語りきれないので、私の人生観を変えた出来事について書こうと思う。

一つ目は、留学生との出会いだ。二年の後期、私は中国からきた張さんと仲良くなった。張さんは日本語を学ぼうと積極的に私に話しかけてくれた。張さんの家に泊まったとき、宝物であるという古い一枚の紙を見せてくれた。そこには「欢迎欢迎！（ようこそ！）」という文字とともに日本と中国の国旗が書いてあった。留学生が住むアパートに置いてあったと言っていたので、代々留学生たちが引き継いでいっているのだろう。シンプルな紙を「私はこれが大好きなんです。」と笑いながら大切にしまっている彼女をみて、「ああ、友達に国の境なんてないな。」と思った。国際交流という言葉をよく耳にする時代になったが、国と国

の交流というより、人と人との繋がりであると実感した。国についてどう思うかではなく、その国のその人についてどう思うかを大切にしたい。同じ日本人でも気の合う人もいれば合わない人もいる。それは外国人と付き合うときも同じだ。張さんは外国人スピーチコンテストに出場し、日本のメディアで中国人のマナーの悪さが批判されていることに触れた。彼女は日本のメディアの偏った報道を知っていたが、私を責めることはなかったし、私も彼女がメディアに映る一部の中国人と同じ性質を持つとは思わなかった。張さんは文化の違いが他国ではマナー違反になることもあると冷静に分析し、コンテストでは奨励賞を取った。彼女といるとき、私もいくつかの文化の違いを目の当たりにしたが、それがストレスになることは全くなく、むしろお互いに相手の文化を面白いと感じて話のネタになった。学業の面においても張さんとの出会いは最高の出来事だった。私は中

国語を勉強していたので張さんに発音を教えてもらい、私は彼女に日本語を教えた。

二つ目は、編入試験だ。もともと四年制大学に落ちて県短に入学した私は、一年生のときから短大卒業後は四年制大学に編入しようと決意していた。最も苦勞したのは小論文で、最初に書いた小論文は恥ずかしくて見返せない。それでも、なんとか合格できたのは指導してくださった先生たちのおかげだ。試験が終わった後も私はたびたび先生たちの研究室にお邪魔して、世間話をしている。先生たちと話していると、気づいたら二、三時間経っていたということがよくあった。思い返すと他愛のない話ばかりだったように感じるが、慌ただしい短大生活に欠かせないひと時だった。また、面接試験で得たものもあった。面接官とゼミの研究について問答を重ねるうちに、今までゼミで学んできたアダプテーションが想像以上に多角的な視点から研究できる分

野だと気づいた。その結果、私は卒論のテーマを映画研究からアダプテーションに変更して、やりがいのある研究をすることができた。編入のための勉強は確かに辛いときもあったが、私を成長させてくれた期間だった。先日、高校の同窓会があり、三年次の先生と話した。先生は私なら絶対に志望校に通ると思っており、私も自信があった。だから、落ちたと分かった後は、少し気まずく、一切連絡を取っていなかった。しかし、久々に会った先生に私は「県短に行くことができてよかった。」と素直に伝えることができた。浪人するという選択肢もあった中、県短を選び、様々な経験ができたことを誇りに思う。ここでしかできないことを存分に満喫した。県短での貴重な出会いに感謝する。

《編集後記》

今号は、遠峯先生に国内留学について書いていただきました。

「彙報」は次号に掲載します。昨年と同様に、オープンキャンパスにあわせての発行を目指します。

『人文学会報』は、文学科ホームページ(<http://www.k-kentan.ac.jp/it/>)に掲載しています。

『人文』論集の方は、鹿児島県立短期大学リポジトリ

(<https://k-kentan.repo.nii.ac.jp/>)で公開しています。(望月)



＜平成30年度卒業研究標題＞

文学科日本語日本文学専攻

氏 名	卒 業 研 究 標 題
《楊ゼミ …… 日本語学・日本語教育学》	
石田尾 菜奈子	漫画でみる男ことば、女ことば ―差異と変遷―
岩 下 加 奈	小説における言いさし表現について
四反田 亜 美	「かわいい」は日常会話においてどのように使用されているかについて
田 中 友 海	会話におけるつながりの「なんか」について
肥 後 摩 子	鹿児島は外国人にとって過ごしやすい街なのか ―コミュニケーションにおける実態調査を通して、今後の鹿児島について考える―
眞 茅 未 来	少女漫画での嫉妬表現 ―男女差について―
増 満 美樹子	相づちにおける男女の違いについて ―トーク番組を利用して―
《望月ゼミ …… 上代文学、日本語学》	
瀧 本 汐 梨	上代文学における「あの世」観について ―「黄泉国」、「根国」、「常世国」が内包する性質と比較神話的観点からの「あの世」―
富 永 菜々花	児童文学における魔法の呪文について
大 前 杏 優	歌詞に含まれる七五調のフレーズについて
福 崎 りか子	少女向けアニメの主題歌の歌詞研究
弓 削 あやか	今村明恒『地震の話』の日本語学的研究
《土肥ゼミ …… 中国文学》	
岩 元 悠 希	『搜神記』中の龍がその他の動物から受け継いだ特徴
尾 曲 祐 美	「蓮」の分類からみる王維の特徴
清 川 理 衣	『列仙伝』における仙薬と松の葉、松の実について
西 花 春 菜	『大唐三蔵取経詩話』と『西遊記』における三蔵法師の人物像
花 田 梨 乃	『孫子』が呉に与えた戦術について
《竹本ゼミ …… 日本文学・近代》	
中 原 蘭 香	江戸川乱歩『白昼夢』を読む
中 園 梨夏子	「目羅博士の不思議な犯罪」で登場するビルディングについて
吉 田 圭 見	『お伽草紙』における語りと時代背景についての研究
野 崎 ほのか	坂口安吾『白痴』における人間らしい存在についての研究 ―〈墮落〉にある人間らしさ―
瀬戸口 真 由	『みづうみ』における視覚について ―都市空間を手掛かりにして―
垣 内 彩 華	三島由紀夫の『憂国』における夫婦の最期に込められた意味について
下 野 真利花	安部公房『人間そっくり』におけるトポロジー理論の役割と、「壁―S・カルマ氏の犯罪」 との比較から見る〈人間そっくり〉なものの存在に関する考察
山ノ内 杏 果	宮本輝『泥の河』・『螢川』 ―「こども」と「性」―
森 帆 波	大江健三郎『「雨の木（レイン・ツリー）」を聴く女たち』における作品形式と語り手について
《木戸ゼミ …… 日本文学・古典》	
岩 倉 修 子	月の世界とかぐや姫 ―『竹取物語』で月の世界が描かれていることの意味とは―
東 眞 子	在原業平 歌から考える性格や人物像
田 中 宥 希	小野小町の歌からみる彼女の恋愛観について
伊牟田 さや香	『落窪物語』における結婚という儀式とそれに伴う感情の有無についての研究
西 畑 咲 香	源重之はどのような教育をしたのか
西 田 朋 華	『枕草子』物尽くしにおける地名は清少納言の感性か
原 口 美 紅	「六条御息所」と「生霊」の関係について
岩 崎 未 有	『とりかへばや物語』における父、左大臣の役割についての研究
寺 田 桜 心	『とりかへばや物語』における女主人公と宰相中将の関係性について ―二つの性を生きた女主人公にとって宰相中将はどんな存在だったのか―
野 中 未 来	『とりかへばや物語』にみられる美の概念の考察
永 峯 望 幸	なぜ藤原義孝の「きみがため」は百人一首に選ばれたのか
的 場 律 姫	和歌に詠まれた星は感情と結びつくのか

＜平成30年度卒業研究標題＞

文学科英語英文学専攻

氏 名	卒 業 研 究 標 題
《英米文学演習》（指導教員：轟 義昭）	
小 村 茉 緒	アガサ・クリステイ作品の比較研究 —ポアロ像とトリック—
南 愛 咲	映画から見るLGBTとこれからの在り方
畦 地 乃 愛	アナザーストーリーとしての『ウィキッド』
Nguyen Mai Linh	A Comparative Study of <i>Gone Girl</i> and <i>The Girl on the Train</i> : Dark Patches in Love and Marriage
久木田 希	映画から読み取るナチスドイツと彼らのユダヤ人迫害
榊 知 可 子	Black music がアメリカ社会に与えた影響 —映画『ドリームガールズ』『キャデラック・レコード』を中心に—
塩 満 佑里恵	フェミニズムの視点からみる映画『ブラダを着た悪魔』
下 野 葉 帆	映画『きみに読む物語』の研究 —映画で引用されたホイットマンの詩—
谷 口 凜	アニメ映画における挿入歌の役割
西 元 萌々花	漫画から映画へ —非難されるアダブテーション—
山 村 花 梨	映画『パイレーツ・オブ・カリビアン』のなかの海賊
《比較文化演習》（指導教員：小林 朋子）	
中 村 沙 里	Minority People —映画「エデンより彼方に」からみる少数派の人々—
井手ノ上 菜々	カワイイの変遷 —大正ロマンからロリータファッションまで—
大 重 優	白人に愛されたブラック・ミュージック —「ジャズ・エイジ」からボブ・ディランまで—
尾 崎 莉 奈	時代とともに変化する翻訳 —森田思軒から村上春樹まで—
唐 鎌 優 花	日系移民がハワイに及ぼした影響 —サトウキビ産業と衣食住から見る日本の文化を通して—
長 野 充 月	ブルースに込めた想い —アメリカ黒人の歴史を辿る—
野 村 優 華	人間開発と女性の人權
福 迫 由 菜	異世界物語『千と千尋の神隠し』の世界観
本 村 海 帆	「新しい女性」 —『デージー・ミラー』と『目覚め』から見る—
本 村 優 奈	ケイト・シヨパン『目覚め』から読み解く「幸福」な生き方
《英語学演習》（指導教員：遠峯 伸一郎）	
池 崎 穂乃花	有声阻害音の与えるイメージについて
大 森 彩 夏	楽曲『シャルル』における翻訳歌詞の英語表現
金 田 希 麗	『攻殻機動隊 S.A.C. 2nd GIG』の英語字幕に見る日本語と英語の表現の違い
上 村 まりを	『食戟のソーマ』にみる擬音語・擬態語の英語訳出について
菅 成 美	『塔の上のラプンツェル』における対人関係と呼びかけ語の相関
武 宮 あすみ	『ハイスクール・ミュージカル』に見られる男性言葉、女性言葉について
《英語学演習》（指導教員：石井 英里子）	
石 塚 愛 理*	A Preliminary Study of Travel Motivations of Foreign Tourists to Kagoshima
片 平 百 香*	Perceived Image of Kagoshima as a Tourist Destination for Foreign Travelers
門 口 修 大	Intercultural Communication between International Students and Local Japanese Students: How Has It Changed in 20 Years?
菊 池 ちはる*	A Preliminary Study of Travel Motivations of Foreign Tourists to Kagoshima
竹之下 菜 嘉	Kagoshima Hospitality and Foreign Tourists' Satisfaction
畠 中 菜々子	How Can We Bring Foreign Tourists to Isolated Area?: A Case of Chiran Town
日 高 愛 有*	Perceived Image of Kagoshima as a Tourist Destination for Foreign Travelers
南 来 樹	Effects of Collaborative Learning on Japanese College EFL Learners' Vocabulary Learning
(*印は共同研究)	